【霊総受け】シリアルキラーにあいをつぐ



Photo by Pawel Czerwinski on Unsplash / powered by かんたん表紙メーカー

【霊総受け】シリアルキラーにあいをつぐ【エク、最、芹、ヨシ、アカ、タヨ】

朱音

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=22312569

R-18G, 二次創作, 腐向け, モ腐サイコ100, 霊幻総受け

師匠総受け、総愛されwebイベント展示品。
2024.10.

攻め達を篭絡しはべらせる殺人鬼師匠が見たかったので自給自足。

※師匠が連続殺人鬼
・師匠に複数のモブキャラとの結婚歴有(受)
・師匠によるモブキャラ男の寝取り
・ネームドキャラの死
・ネームドキャラの家族の死
・擬人化怪異捏造♂(アカグロサマ、タヨリ)
・親子や病人を含むモブキャラの死亡
・いじめ
・自殺
・倫理観の崩壊
・無辜のモブ女性の自殺

◇そんな霊幻をシリアルキラーたらしめている理由はたった一つ。

【怪異二人のキャラデ】

illust/113153124

感想頂けると跳ね飛んで喜ぶ妖怪です。
一言、長文、発狂？うぇるかむ(｀・ω・´)
マシュマロ：https://marshmallow-qa.com/hiiragi_syuin

Table of Contents

- 【霊総受け】シリアルキラーにあいをつぐ【エク、最、芹、ヨシ、アカ、タヨ】

【霊総受け】シリアルキラーにあいをつぐ【エク、最、芹、ヨシ、アカ、タヨ】

霊幻新隆は連続殺人鬼、俗（ぞく）に言うシリアルキラーである。未解決事件の多くに関わり、未だに逮捕されていない。何故かと問われれば、シリアルキラーであるのに特徴が一貫していないように見えるから、というところが大きい。霊幻本人からすると非常に分かりやすい特徴ではあるし、一部の根強いファンもこうではないかと気づいている。

夫殺し。

何だそんなありきたりな共通点かと思えるのは、昨今では広まりつつある男と男の結婚に理解のある者達だろう。
彼は男だ。男で、男を愛した。そんな霊幻をシリアルキラーたらしめている理由はたった一つ。

"信じてもらえないから"

それだけである。
霊幻と共に在るアカグロサマとタヨリの存在を、夫達が信じてくれないから。

二人は霊幻と共に孤児院で育ち、同じ男に引き取られ"殺された"。
一番年下だった霊幻が男に犯されるのを防ごうとした二人は、まるで怪異であるような呼び名をつけられ、挙句（あげく）殺されたのだ。
顔の半分が赤黒く爛（ただ）れた様（さま）をした少年は、その見た目からアカグロサマ。同じく顔の半分が爛れた上に体も弱かったタヨリは、誰かに頼らねば生きられない軟弱者のタヨリ、と。
そんな二人と霊幻は、孤児院とは名ばかりの人身売買所の頃から、ろくに倫理道徳も教えられず放置され育ったものだから、お互いを

兄弟のようにも、恋人のようにも想っていた。
大事な兄弟で恋人である二人が殺されたのなら、どこにでも刃物を放置する雑な男の部屋に転がっていた包丁だったか、ハサミだったかを使い、幼い霊幻が二人の仇をとったとしても何らおかしくはない。おかしくはないのだ。

たとえ二人の命を奪った男を殺した行為に、悦（えつ）を覚えたとしても。

だって受け入れない方が悪い、信じない方が悪い。二人は確かに存在するのに、普段は見ることのできない霊幻でさえ信じられるのに。夢枕に立ってもらってお喋りするのが、日々のささやかな楽しみの一つだというのに。やれそこだけがおかしな男だの病気だのと、失礼極（きわ）まる。
目の前に転がるこの”男だったもの”だって、存在を信じないばかりか二人が殺されたのは運がなかったから、なんて酷い事を言うから。運なんて不確かで目に見えないものを肯定出来るのに、同じく目に見えない幽霊は肯定出来ないなんて、狂っているのはこの男の方だ。ただ夫に信じてもらいたくて殺し続けているだけの霊幻よりよほどたちが悪い。自分は運がないのだと口癖のように漏らしていた気がするのに、同じく目に見えない二人の事は信じないし鼻で笑えるなんて。

「分からないな」

霊幻は小さく溜息を漏らし、今日の夕飯の事を考えた。ザクザク刻んで袋詰めしている元夫の好物を用意する予定だったが、もう思い出したくもない。こんな男のためにわざわざメニューを変えなければならないのかと思うと、一度吐き出しただけでは足りない憂鬱が、再び溜息として肉の詰まる袋へ落ちた。

エクボ

殺されるほど悪い男ではなかったはずだ。少なくとも、ミンチにされて袋詰めされるほど悪い男では。

そう言うと、シリアルキラー霊幻新隆は、ことり、と首を傾（かし）げて見せた。

エクボが友人の死を知ったのは、自身のつとめる病院での事だ。自殺だった。
俗物的に言ってしまえば、彼女は夫を寝取られた挙句、一度でも夫として愛した男を無惨に殺され自殺した。エクボからしてみれば、元夫は夫としても人としても最低であり、寝取られて良かったのかも知れないとまで思っていた。彼女の話を聞く限り、精神的に依存させる事に長けた男で、暴力を振るっていたと思ったらたまに優しく笑いかける、そのバランスが非常に上手かった。
離れられたのならよかった。彼女の怪我を診ていたエクボは、体中の傷が段々と治り、夫とは疎遠になっていくのを喜んですらいたというのに、自殺。
彼女が病んで自殺するほどの価値が、暴力夫の死にはあったのか。それはエクボが断じていい事ではない。価値などなかったと否定するのは簡単だが、それでは彼女の死が何の意味もなかった事になってしまう。
二人とも亡くなってしまった以上、エクボに出来るのは、自身の気持ちを整理する事だけだった。彼女の友人として、或（ある）いは興味もあったのかも知れない。最低の男を寝取り殺すなどという、エクボからすると不思議で仕方がない連続殺人鬼に。

霊幻新隆がシリアルキラーだと気づいたのは偶然だ、何故なら彼は殺し方に共通点がない。口の堅い警察の知り合いが、思わずといった風に漏らしていた未解決事件の犯人、その多くが彼ではないかという言葉に引っかかった。そこまで分かっていて手を出せないでいるのならば理由があるはずだ、と。独自に調べて真っ先に辿（たど）り着いたのは、彼のファンによる考察サイトだ。丁寧に隠され

たサイトに、事実と考察、彼を調べていれば気づくであろう、別の人間による殺人なども織り交ぜられていた。その中の誰一人情報提供をしようとしないのは、恐らく興味を持った全員が、彼に魅せられているからだろう。

エクボと同じように。

一貫性のない殺害方法という名の共通点、何人も手にかけていながら未だ捕まらない手際と頭脳。殺しているのはどうやら、世間的には評判がよく、警察などの手が入りにくい悪党。最後は少しズレている気がする。悪党だから殺している訳ではなく、殺した人物が悪党だっただけではないか、というのはエクボの考察だ。
兎角（とかく）、彼の手管（てくだ）に、残虐性に、ネジが数本いかれてしまったその在り方に魅せられたものは多い。
ただ、こうして彼に辿り着けたものは少ないのではないだろうか。辿り着いた先のあまりの平凡さに、その中に見える狂気に再び魅せられたまま生きていられるものは、限られているのではないか。

殺人鬼に寄り添うようにいる男の霊二人が、きろり、エクボを見据（みす）えるのと目が合った。

最上啓示

最上啓示はシリアルキラーだった。
だった、というのは、連続殺人鬼として活動していた理由である、病の母が死んだからだ。母の治療費のため、元々持っていた霊能力を使えるだけ使った、呪えるだけ呪った。金を払って他人（ひと）を呪いたい人間などいくらでもいた。ただ同じくらい、人殺しという呪いが、母と我が身に降りかかった。
人を呪わば穴二つ。
結果、最上の母は、最上の行いによって蓄積された呪いで死んだ。滑稽な話だ、救おうとした母に、自らとどめを刺したのだから。首

でもくくろうかと思った矢先、最上の模倣犯と噂される連続殺人鬼の話が聞こえてきた。

興味。
そう、シリアルキラー霊幻新隆に、興味を持った。

呪殺（じゅさつ）を生業（なりわい）としていた最上の模倣犯と噂されるのならば同業者なのだろうか。殺害方法は、超能力や霊能力の有無は、動機は。
秘匿された彼を調べるにはどうしても必要だった、丁寧に隠されたファンサイト。それを見つけるため、苦手な機械類の使い方を必死に覚え、どうにか辿（たど）り着いた答えは、"似てはいるが模倣犯ではない"だった。
ファンを魅了してやまないその殺害方法や手際から、流れるようにごく自然に殺しているのが分かる。そこに、似せようという意思は感じられなかった。似てしまった、或（ある）いは、ほんのひとつまみだけ参考にしている、そんな印象を受ける。
ファンサイトの情報や考察などからは、法で裁けない呪殺（じゅさつ）でないのが分かる。特殊な能力を使わずに最上の模倣犯と噂され、連続殺人鬼として未だに捕まっていない。

面白い、と思った。

救おうとした母を殺め、何人もの見知らぬ誰かを殺め、つい先刻まで死のうとしといた最上にそう思わせる事のできる怪物（いとしいひと）。
ならばこちらも怪物（さつじんき）としての礼儀を尽くし、霊能力は使わず探し出し会いに行こう。首をくくる事をやめたあの瞬間から、最上啓示という連続殺人鬼は彼に魅了され、命を取り留めたのだから。

「本物の最上啓示さん？」

「ああ、気になるのならそばにいる二人に聞いてみるといい。私には間違いなく殺した者達の呪いが纏（まと）わりついているだろうからな」
「聞かなくても分かるよ、貴方のファンだから」
何に対してかふわりと柔く笑んだシリアルキラー、霊幻新隆はあまりに平凡だった。
故（ゆえ）に、覗（のぞ）く深淵はどこまでも、どこまでも、彼を美しく彩る。

芹沢克也

芹沢克也はシリアルキラーに救われた。
学生時代の事だ。救われたと言っても、一方的に。

芹沢をいじめていたのは、財力も権力も持つ男の息子。彼は超能力を持つ芹沢を、分かりやすくいじめの対象にした。教師は知らない、証拠を残さない狡猾（こうかつ）さがあった。生徒は加担するか知らない振り、仲がいいと思っていた彼らは、ある日突然、牙を剥（む）く。
人が人を殺すのに刃物は必要ないのだと、身をもって知らされた。
全員、殺してやりたいほど憎かった。同じくらい、どうする事も出来ない芹沢自身も、殺したいほど憎かった。憎いくせに殺せない、憎いくせに自殺（ころ）せない。自分自身の愚かしさが、何よりも許せなかった。
憎くて、悔しくて、
苦しくて、醜くて。
昨日は自身を呪い、今日は皆を呪い、明日はまた自身を呪う。
何度も、何度も、
何度も、何度も。
自身の心をまあるい刃（やいば）で刻むように。
刃（は）の欠けたナイフを振り下ろし続けるように。

そうして、皆と自身へ渦巻くどろりとした殺意だけが、芹沢を生かしていた。膿（う）んで腐り落ち続けるほど心に負った傷を残し、終わりは呆気なく訪れる。主犯である少年が転校したのだ。どうやら少年の父親が男に浮気した挙句（あげく）、その相手に殺されたらしい。
今日死のうか、明日死のうか。
そんな事ばかりを考えて生きていた芹沢にとって、浮気相手は、彼は救世主だった。
どんな男だろう、噂通り男なのだろうか。夫殺しとも悪党殺しとも言われているが、殺しの期間がバラバラなのは何故か。警察の手を逃れるためかもしれない、けれど芹沢には、彼なりに夫を愛したからに見えた。
調べれば調べるほど、その鮮やかな手口に、芹沢などでは到底敵わないほどネジの飛んだ思考に、膿（う）んだ心は癒される。腐り空（あ）いた穴は満たされる。
彼を調べるうち身についたハッキング技術を使い、芹沢は引く手数多（あまた）のハッカーになった。出来る事ならこの技術と超能力は、救世主である彼のために使いたい。

狂い落ちた芹沢が赦（ゆる）されたいのは、
そばにいたいと想うのは、
この世でたった一人。

会いたい、会いたい。
愛たい。愛たい。

彼が使っていないのならば、芹沢も使うべきではない。超能力を封じ見つけ出した夫殺しのシリアルキラー、霊幻新隆は、芹沢の恋焦がれ想い描いたどんな姿よりも普通で、それ故（ゆえ）に深く、美しく、狂気に満ちていた。

ヨシフ

一より十を取った事がある。
装備を整え登山した親子二人を切り捨て、雪山を舐め切った軽装の十数人を救助した。
軽装備では長くもたない、早めの救助を、という流れになったからである。
吹雪が止めば視界に入るほどの距離にいた親子は、次にヘリが飛んだ時、寄り添ったまま亡くなっていた。

十より一を取った事がある。
老人や病人を庇（かば）い励まし合いながら救助を待つ十数人を切り捨て、真っ先に救助されるのが当然だという態度の権力者を救った。
急いで戻った瓦礫の下から、病人を庇うように折り重なる、老人を含んだ十数人の亡骸が見つかった。

彼らを見つけた瞬間の、助かるという希望に満ちた瞳が、眼窩（がんか）深くに滲（にじ）んで離れない。
彼らを見捨てた瞬間の、絶望と諦観（ていかん）を孕（はら）んだ瞳が、脳に焼きついて離れない。

命令だった。
人としてどうであれその判断は正しく、確実に救える命を救った。
組織の今後を考えれば必要な事だった。守りたいと願った善良な市民を、ヨシフは自ら切り捨てた。
そんな事ばかりに占められた精神（こころ）が、素直に、自由に生きる連続殺人鬼に傾（かたむ）いたのは、殺して欲しいからなのか、在り方に憧れたからなのか。
シリアルキラーではないかというガワはあるのに、全容は一向に見えてこない。まるで幽霊だ。いっそ超能力や怪異の類（たぐい）であってくれと作られた部隊に配属されたヨシフは思う、これでは捕まらないだろう、と。

調べるうち、彼は県をまたいで殺人を犯している事に気づいた。
知っているのだ、己を捕まえようとする者達が一枚岩ではない事を。共有されない情報、いつまでも結びつかない殺人。分かっていて手を出せないのは、ヨシフに権限がない、ただそれだけ。爪弾（つまはじ）きにされたと同義の部隊はヨシフ一人で、理由は至極（しごく）単純、超能力を使い民間人を助けたから。助けた事で、上官の息子である警察関係者を切り捨てる形になったから。
後悔はしていないが虚（むな）しくはあった。その後、助けた民間人は自殺したからだ。公（おおやけ）にはなっていないが、上官の孫、つまり警察関係者の息子に、酷いいじめをうけたようだった。いじめが罰される事はない、死者が出てようやく明るみになり、その後ネタとして消費されてゆくだけ。生きていたい、死にたくないという本能があるにも関わらず自殺する意味が伝わる事はなく、追い込んだ側を庇（かば）う意見さえ出てくるのだから当然の帰結（きけつ）ではあった。

ただ、己がここにいる意味を考えるようになった。

自らの意思に素直で自由なシリアルキラー、霊幻新隆。ヨシフには実現する事の出来なかったそれを、超能力を使わず行使する彼に惹かれるようになった。出会えばどうなるのかを理解していながら、捕まえるという名目で。

目にした彼はどこまでも普通で、それ故（ゆえ）、孕む狂気が壮絶なまでに魅了する。

男は重い身体に鞭打ち、やっとの思いで霊とか相談所という看板を掲（かか）げた事務所のドアを開く。なんとも胡散臭い名前ではあるのだが、どこの病院にかかっても何も見つからない、心の病ではと対症療法のみで自分が悪いのかと不安ばかりが募（つの）る。かといって悪霊祓いを生業（なりわい）としているらしい者達の価格

設定は、不調に全身を病んだ男の財布には重過ぎた。寺や神社は知り合いが来る可能性があるし、"きもち"とはいくら出せばいいのか、治らなかった場合足りなかったからなのかと、矢張り不安を煽られる。
藁（わら）にもすがる思いで見つけたのは、胡散臭くはあるが破格の相談所だった。素人知識で考えたところでどこも胡散臭いならば、せめて財布に優しい場所がいい。鬼が出るか蛇が出るかと訪ねた先は、存外普通の事務所だった。
所長と名乗る男は狐色の髪に深い灰色の瞳で、軽薄にも見える。しかし、柔らかな表情と声音、鼠（ねずみ）色のスーツという、他の霊能関係者よりよほどまともに見える様（さま）は男を安心させた。
茶や菓子を出してくれた男は少しおどおどしているが誠実で好感が持てたし、所長の背後に控える強面（こわもて）の男は終始優しい眼差しで彼、霊幻新隆を見守っていた。時折、誰も話していないはずの状況でぼそぼそと低く呟（つぶや）いていたから、他にもなにかいるのかも知れない。
施術室だと説明された部屋から出てきた年配の男性は落ち着いた雰囲気で、静かな音が「この案件は私向きだろう」と告げる。声を張っていたつもりもなかったのに別室の彼に内容が伝わっていた事で、先ほどの低い呟きと合わせて、ここは本物の霊能相談所なのかも知れないと思わせた。
除霊の方針を決めて支払いを済ませ扉へ向かうと、丁度開いたそこから坊主頭で強面の男が現れた。扉を開いたまま「気をつけて」と声をかけられて相談所を出る。しばらくしてからやっと、彼は来たばかりなのに、一瞬見ただけで自分と相談所の状況を把握したのかと驚いた。
少しずつ除霊した方がよさそうだと言われたので通う必要がある。まだ問題は完全解決していなかったが、心と体が少し軽くなっていた。
あそこはきっと本物だ。
除霊が上手くいったのならお礼に口コミを書いて広めよう。霊とか相談所は値段も手頃で、所長も所員も丁寧に対応してくれる本物の

霊能相談所だ。

自分は彼らに救われた、と。

―――――

《最近シリアルキラー様の事件見ないね》
《俺らのカリスマが！！！！》
《まぁまぁ、それであのお方が残した奇跡が消える訳じゃないし》
《けどさー》
《いいじゃん？これで最後まで捕まらなかったら伝説よ？》
《それ》
《いま二十歳から三十歳くらいだとして、もう数十年経っても捕まらなければ実質勝ち》
《やめろ！勝ちは嬉しいがカリスマの死なんて認められるか……！》
《複雑分かるw》
《もうヤらんのかねぇ、だとしたら――――》

―――――

もう彼らを捕まえられる者はいない。
もう彼らが殺すべき者はいない。

シリアルキラー霊幻新隆の死（あい）。
彼らはやっと、永劫の安寧を手に入れた。

＋＋＋＋＋

【シリアルキラーに死（あい）をつぐ】